



Data

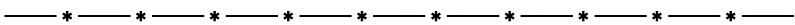
監督：廣田裕介
 製作総指揮・原作・脚本：西野亮廣
 原作：にしのおきひろ『えんとつ町のプペル』（幻冬舎刊）
 声の出演：窪田正孝／芦田愛菜／立川志の輔／小池栄子／藤森慎吾／野間口徹／伊藤沙莉／諸星すみれ／太平洋生／宮根誠司／飯尾和樹／山内圭哉／國村隼／本泉莉奈

👁️👁️ みどころ

私はお笑いコンビ「キングコング」もお笑い芸人・西野亮廣も知らない。だって、TVにお笑い芸人が登場すると条件反射的にリモコンのスイッチを切ってしまうのだから。したがって、「西野亮廣エンタメ研究所」も知らないし、彼が書いた絵本も知らない。しかし、映画を観ると意外や意外・・・。

『鬼滅の刃』（20年）の興行収入が300億円を突破し、歴代NO.1になったが、「成功ラインは100億円!？」と公言している本作の出来は？観客数は？

西野流コンテンツマーケット論の成否は半年後、ないし1年後に出るはずだが、本作はキャラクターもストーリーも、そして世界観も個性的で面白い。ラストに見る「スパルタクスの反乱」ならぬ「ルビッチの反乱」の成否に注目しながら「信じること、夢見ること」の大切さを考えたい。コロナ禍の今、非常事態宣言を発出することの意味はナニ？その混乱ぶりを目の当たりにするにつけても、ルビッチの勇気に拍手！



■□■西野流コンテンツマーケティング論とその実践に注目！■□■

私は基本的に“お笑い芸人”は嫌い。しかし、日本の民放テレビはお笑い芸人が大好きだ。近時は、NHKまでも司会者やバラエティー番組のヒナ壇に次々とお笑い芸人を起用している。もっとも、“ツービート”という漫才コンビから出発したビートたけしこと北野武が、多方面で発揮している才能を見ればわかるとおり、“お笑い芸人”とひとくくりにすることがナンセンスなことも当然。なぜなら、お笑い芸人から出発した後、俳優業や司会業などに活動領域を広げ、成功している人もたくさんいるからだ。しかして、本作の製作総指揮・原作・脚本者である西野亮廣は、1980年に生まれ、1999年に漫才コンビ“キ

ングコング”を結成したお笑い芸人だが、絵本作家としての活動の他、ビジネス書の執筆者としても活躍しているらしい。なるほど、なるほど・・・。

さらに注目すべきは、私は全く知らなかったが、彼は、近時大きく広がり、コロナ禍で飛躍的に拡大した“クラウドファンディング”の概念を日本に広めた先駆者であるとともに、“オンラインサロン”という概念を広めた人物らしい。そして、「西野亮廣エンタメ研究所」と名づけた彼のオンラインサロンは、登録者数7万人という日本最大のサロンとして大成功しているらしい。私も本作鑑賞後、本屋をうろついている中で、ベストセラーのコーナーに彼の12月18日発売の本『ゴミ人間 日本中から笑われた夢がある』を見つけ、約30分間立ち読みしたが、「本作の成功ラインは100億円!？」と公言している彼の意気込み、いや、意気込みではなくマーケティング戦略は興味深い。

コロナ禍に見舞われた2020年に、『鬼滅の刃』（20年）が興行収入300億円を突破し、歴代トップに躍り出たのは、ある意味で奇跡だが、他方では周到なマーケティング戦略の結果とも言える。そう考えると、本作の鑑賞を機に、西野亮廣流マーケティング論とその実践に注目！

■□■絵本を映画化！それは逆！製作総指揮・原作・脚本を！■□■

近時の邦画はヒット小説を原作として映画化するものが多い。それは一つの流れだから悪くはないが、同時に、映画のオリジナル脚本の書き手がなくなったことの表れでもあるので、それは痛い。しかして、2016年に発表された西野亮廣の絵本『えんとつ町のプペル』は「大人も泣けるストーリー」と話題を集め、57万部越えの大ヒットになっているそうだから、西野流マーケティング戦略からすれば、当然その映画化を狙うことになる。誰でもそう考えるはずだが、西野亮廣に言わせると、それは逆。すなわち、彼にとっては、絵本よりも映画の構想の方が先にあり、2011年ごろから書き始めた絵本は、将来映画化するためのネタだったらしい。そんな壮大な計画で絵本を書き、「西野亮廣エンタメ研究所」を運営してきた結果、今般やっとそれらの集大成として、彼が製作総指揮・原作・脚本を務めた本作が完成したわけだ。

本作では、監督、演出、アニメーション監督、キャラクター監督、絵コンテ・演出等々の製作スタッフは多岐にわたっているが、脚本は西野亮廣が1人で担当している。したがって、本作の成否（興行収入100億円越え）のカギは、1人、西野亮廣にある。逆に言えば、監督などの責任は薄い。さあ、西野亮廣のそんな壮大な実践の成否は？

■□■舞台は？主人公は？世界観は？■□■

本作の舞台はタイトル通り、えんとつ町。しかし、主人公はタイトルとは異なり、少年・ルビッチ（芦田愛菜）だ。しかして、えんとつ町はどこに？プペル（窪田正孝）って一体誰？『鬼滅の刃』と同じように、いくら世間で大ヒットしていても、それに興味のない人はその中身をサッパリ知らない。私も『鬼滅の刃』と同じように本作については何の予備知識もなかったが、冒頭にナレーションで語られるえんとつ町についての説明を聞いて、

なるほど、なるほど。

私が弁護士登録をした1974年当時の日本は大気汚染公害が深刻化しており、とりわけ西淀川、尼崎地区に集積した工場の煙突から出る煙は、大量の硫黄酸化物(SOx)を含んでいたため、深刻で、かつての青空は失われてしまっていた。そんな大気汚染問題を知り、西淀川大気汚染公害訴訟弁護団の一員として長い間活動した私の目には、本作に見る黒い煙に覆われ、周囲を4000メートルの城壁に囲まれた“えんとつ町”はかなり異常。しかも、このえんとつ町では空を見上げることが禁止されているというから、えんとつ町のリーダーは、中国で独裁体制を強化している習近平国家主席以上の独裁者？

もっとも、町の人々は空の向こう側にどんな世界が広がっているかなんて想像しないから、朝から晩まで煙に覆われた町、外の世界を知らない町、星空を知らない町を、“えんとつ町”と呼んでいるのはルビッチの父親・ブルーノ(立川志の輔)だけだ。ところが、星があると信じ、星の話、黒い煙のその先にある光輝く世界の話を紙芝居にして伝えていたブルーノは、みんなから嘘つき呼ばわりされ、姿を消してしまったから大変。香港では2020年6月30日に「国家安全維持法」が制定されたが、戦前の日本には「治安維持法」があり、天皇制反対を唱える日本共産党を始め、いわゆる民主勢力は弾圧されていたが、その任務を担っていたのが「特高警察」だ。「特高警察」は不穏分子の情報を集めるべく、広く国民から情報を募っていたが、えんとつ町でそれと同じような役割を果たしているのが、レター家の末裔・レター15世(野間口徹)をリーダーとする「異端尋問所」。なるほど、なるほど、本作を鑑賞するについてはまず、そんな“世界観”をしっかりと確認する必要がある。

その結果、ブルーノがいなくなってから1年の歳月が流れたルビッチは、父親が教えてくれた星の存在を信じながら母親のローラ(小池栄子)と2人で暮らしていたが……。

■□■もう1人の主人公たる“ゴミ人間”、ペペルに注目！■□■

本作の表の主人公はルビッチだが、もう1人の(ウラの)主人公は、原作者の西野亮廣が創造した“ゴミ人間”ことペペル、つまり、タイトル通り、えんとつ町のペペルだ。

本作は、町がハロウィンで盛り上がる中、子供たちが思い思いの仮装でダンスを楽しんでいるシークエンスから始まるから、平和そのもの。世界情勢が緊迫化する中、“平和ボケ”を享受している日本と全く同じだ。しかし、その場に現れたゴミ人間が、仮装ではなくホンモノの“バケモノ”だとわかった、たちまち大騒動に。スクリーン上はその直後、ゴミ処理場に送られているゴミ人間を撃つルビッチが、これを救出する冒険劇が描かれ、その後、ルビッチによってペペルと名付けられたこのゴミ人間とルビッチが友達になる感動的なシークエンスが描かれる。さらに、その脱出劇の中には、鉱山の採掘泥棒のスコップ(藤森慎吾)も登場するので、この男のキャラクターと、クライマックスで果たすこの男の役割にも注目！

ハリウッド製の『アイアンマン』(08年)は、「最も強力な武器を作ることが平和への

一番の近道」という理屈に沿って強力なパワードスーツを作る主人公の姿が描かれていた（『シネマ20』22頁）。その姿は、鎧兜に身を固めた中世の騎士風で、メチャカッコよかった。他方、そのイメージをそのままにしながら塚本晋也監督が創造したのが、『鉄男 THE BULLET MAN』（09年）（『シネマ25』179頁）。『アイアンマン』の主人公はパワードスーツを着用することによってアイアンマンに変身するから、その変身は自律的だった。それに対し、『鉄男 THE BULLET MAN』の主人公・アンソニー（エリック・ボシック）が“鉄男”に変身し、さらに強力な銃器まで備わるのはアンソニーの怒りが最高潮に達した時という設定だから、彼の変身は他律的であると同時に自律的だから、『アイアンマン』より設定が複雑だった。

それらに比べれば、西野亮廣が創造したゴミ人間＝プペルは、ゴミの寄せ集めで作られた単純なもの。そして、客席には伝わらないものの、その体臭はかなり臭いらしい。しかし、本作で注目すべきは、プペルの心持ち。すなわち、ルビッチから友達の意味を説明されて、それに納得したプペルの心持ちは？そして、プペルがルビッチに対し、友達として見せる行動は？

■□■星を語り、まだ見ぬ星を夢見ること、それがなぜ悪い？■□■

ルビッチの父親であるブルーノは町から姿を消していたが、それは彼が「星などあるものか」とみんなから嘘つき呼ばわりされたため。そして、ルビッチは今、プペルをかくまってくれた掃除屋のダン（國村隼）の下でえんとつ掃除の仕事をしている。

ルビッチは高いところが苦手なのに、なぜ煙突掃除の仕事をしているの？そう思ったプペルがその理由を尋ねると、ルビッチはプペルをえんとつの上に連れて行き、町を見わたしながら、ここで父親・ブルーノからもらった大切なプレスレットを落としてしまったこと、ブルーノがいつも話してくれた「あの煙の上には光り輝く『星』が浮かんでいる」という話をプペルに語った。この話にプペルは、「素敵なお話だ」と興味を持ったが、もちろんこの話は2人だけの秘密。なぜなら、えんとつ町では空を見上げることも自体が禁止されているのだから、その先にある（かもしれない）まだ見ぬ星を夢見することも当然厳禁。星を語り、まだ見ぬ星を夢見れば、嘘つき呼ばわりされ、ブルーノの二の舞になることは明らかだ。しかし、星を語り、まだ見ぬ星を夢見ることが、なぜ悪いの？

そんな中、ある日、ダンが煙突から落ちる事故が発生したが、これは本当に事故？それとも誰かに狙われたの？えんとつ掃除の仲間たちは、「ルビッチがゴミ人間プペルを連れてきたからだ」と騒ぎ立て、「最近、喘息患者が増えたのもゴミ人間プペルのバイ菌が原因だ」と、何でもかでも都合の悪いことをプペルのせいにしたから、ルビッチとプペルは肩身が狭くなる一方だ。さらにある日、町中に国民保護サイレンが鳴り響く中、砂浜に不気味な黒い船が流れ着いたから、町の人たちはビックリ！船の存在を知らない町の人々は、海に浮かぶ得体のしれない物体を「バケモノ」と恐れたが、ルビッチはそれが“船”であることを知っていた。なぜなら、それは、ブルーノが語ってくれた紙芝居に登場していたか

らだ。ブルーノの紙芝居は嘘じゃなかった！船があるなら星もきっとある！そう確信したルビッチとプペルは、「信じることで道は開ける」という父の教えを信じて空を目指すことに。

■□■スパルタクスの反乱は失敗したが、ルビッチの反乱は？■□■

パンフレットには、「今明かされる、えんとつ町の秘密」と「大冒険の先に2人が見た真実とは」の見出しの下、①「星を語るブルーノ」、②「ハロウィンの夜に現れた友だち」、③「普通じゃないと悪として裁かれる町」、④「まだ見ぬ星を夢見て・・・」、⑤「えんとつ町で事件が起きた！」、⑥「立ちはだかる権力者たち」の「章立て」で、本作のストーリーが紹介されている。

そのラストの「立ちはだかる権力者たち」の1人は、えんとつ町を統べる、異端審問所の最高責任者たるレター15世。そしてもう1人は、「お飾り」的なレター15世を意のままに操っている秘書のトシアキ（宮根誠司）だ。ここで面白いのはこのトシアキという人物は絵本には登場せず、映画用のキャラクターだということだが、それはなぜ・・・？ダンの配下でえんとつ掃除をしている掃除屋には、スーさん（飯尾和樹）のようないつもニコニコしている人のいいキャラも登場するが、トシアキはそれと正反対の悪人・・・？そのあたりの分析はなかなか難しいので、1人1人しっかり考えてみたい。

それはともかく、本作ラストでは「信じることで道は開ける」というブルーノの教えを信じて、プペルと共に空を目指すルビッチの姿が描かれるが、ハッキリ言ってこれは無謀かつ無策。私は中学時代に観て大いに感銘を受けた『スパルタクス』（60年）を何度もDVDで観ているが、ハッキリ言って「ルビッチの反乱」は「スパルタクスの反乱」以上に無謀かつ無策だ。チャールズ・チャップリンが監督、主演した『チャップリンの独裁者』（40年）（『ヒトラーもの、ホロコーストもの、ナチス映画大全集』14頁）は、ラスト6分間の演説が見ものだったが、本作ラストに見るルビッチの演説もなかなかのもの。しかし、そんな演説で大衆の支持を集めても、やはり「立ちはだかる権力者たち」の壁は厚い。ちなみに、本作では、ルビッチの幼なじみで、ブルーノの紙芝居と一緒に見ていたにもかかわらず、夢見ることや信じることに臆病だったため、結果的に「反ルビッチ陣営」のリーダーになっていたアントニオ（伊藤沙莉）の動静が、子供たちの勢力図における大きなポイントになるので、それに注目。また、前述したようにチョー個性派の鉱山の採掘泥棒・スコップが、「ドキドキするじゃないか！！」の名セリフをもって「ルビッチの反乱」に賛同し、煙で覆われた空（壁？）を破壊する物資と技術を提供するので、それにも注目！

残念ながら「スパルタクスの反乱」は失敗してしまっただけで、「ルビッチの反乱」の成否は如何に？

2021（令和3）年1月6日記